

令和 2 年 5 月 18 日

“日本の美と宗教について” (色染昭 35 年卒) 山田 英二

§ 1. はじめに；

本資料をまとめた経緯は、弟が日赤の緩和ケア病棟に入り、余命 1 か月と宣告された時、見舞いに行くたびに「色即是空」の様な話しを持ち出して、心の安らぎに寄与出来ないか試みたが、宗教に無知蒙昧な私にとって、宗教の話しによって人の心を慰める事は至難の業である事を悟った。その経験を反省して、梅原猛の「美と宗教の発見」を初め、多くの宗教学や美学関連の本を読んだが、先人達の素晴らしい英知の結晶を読み捨てにするのは勿体ないと思い、自分自身の教材として、抄録的にまとめた次第である。

なお、弟の話しとして「今日はベテラン看護師さんが、頭のとっぺんから足の指先まで丁寧に洗ってくれて、大きなお風呂にリフトでどっぴりと浸けて頂いた時は、天国に行った様に良い気持ちになった」「やすらぎホールで、吹田ギターアンサンブルの演奏会があって、下記の曲目が演奏された。

第 1 部、演奏：春よ来い、七夕さま、夕焼け小焼け、トロイカ、浜辺の歌。

第 2 部、唄： 夏の思い出、みかんの花咲く丘、知床旅情、ふるさと。

第 3 部、演奏：夜霧のしのびあい、第三の男、イエスタディワンスモア等。

この内、トロイカや、知床旅情は、東京で夜学へ通学していた頃、コーラス部でよく歌った歌で、とても懐かしく、涙が出るほど感動した」と、喜びの声を語っていたが、日赤の緩和ケア病棟はソフト、ハード共に充実した施設であって、弟にとっては幸せな人生最後の 1 か月であったと推察される。

§ 2. 梅原 猛の「美と宗教」に対する考え方：

梅原猛は著書『美と宗教の発見』に於いて過去の日本文化論・日本精神史に対する批判的考察を行っており、著名な思想家の問題点を指摘している。

例えば、鈴木大拙と和辻哲郎は、日本の伝統的文化に対する深い理解と、純粹で創造的な考察の元に、優れた日本文化と精神の遺産を国の内外に知らしめた点では、最も優れた日本文化論者であるが、同時に彼らの著書には問題点 (①～③) が多いと指摘し、更に日本の美の類型についても以下の様に論述 (④～⑥) している。

① 鈴木大拙著『禅と日本文化』について梅原の批評：

「禅と日本文化」は禅に対する深い理解が詩的で靈感に満ちあふれた文章によって表現されている。鈴木は日本人がいかに深く自然を愛しているかを論じて欧米人を魅了した。山部赤人、西行、伊達政宗、太田道灌などの例を持ち出し、欧米人の様に自然を征服しようとするのではなく、自然と仲良しになる事を理想としたと論じている。

そして自然に対する日本人の深い理解を知る為には、鈴木は禅仏教を深く極める必要があると言う。禅が日本人の自然愛に初めて深みを与えたと論じた後に、良寛、涅槃図、俳句、茶道などを引用し、また、桜と月を詠んだ詩歌より、日本人がいかに桜と月を愛したかを説

明している。

この様な鈴木¹の詩的で生き生きとした文章によって、ヨーロッパ人は日本人の自然愛と禅の魅力を感じこむかもしれない。しかし、禅渡来以前の日本人の自然愛がいかなるものであり、それが禅によってどの様に変容し、日本文化に浸透したかについては全く触れていない。鈴木は科学的な論証が必要な場所に於いて絶対的な真理や、礼讃の言葉を語りすぎていると梅原は指摘する。

この著書『禅と日本文化』を、禅とその日本文化に対する影響を論ずる学問的な論証の本とするにはあまりにも曖昧模糊としている。この書の豊富な引例と流暢な文章に魅了されて、あたかも禅だけが日本人の自然愛を培ったかの如く誤解を招いている。

唯識の思想、密教の思想、浄土思想、親鸞の思想など、日本文化に深い影響を与えた思想を無視しており、その見解はあまりにも偏狭であると梅原は断じている。

② 和辻哲郎著『古寺巡礼』『正・続 日本精神史研究』について梅原の批評：

鈴木は禅という1点を通じて、深く日本人の精神を掘り下げ、そこから日本文化全体を見渡してゆこうとするのに対して、和辻哲郎の日本文化論は、仏像、寺院建築、万葉集、源氏物語、道元、歌舞伎、人間浄瑠璃、桂離宮など、あらゆる時代の、あらゆる文化現象の中に探求の目を向け、日本精神史という未開拓の領域に先駆的な新しい解釈を提供した点、大いに評価に値すると梅原は言う。

しかし、一方で各時代の文化現象の選択があまりにも恣意的であると指摘する。奈良時代の仏像を取り上げるのであれば、平安時代の密教彫刻、鎌倉時代の運慶や快慶の仏像も取り上げるべきである。道元や親鸞が問題にされるならば空海や最澄、日蓮について触れるべきであり、歌舞伎が問題にされるならば、何故、能は問題にされないのか。

また、奈良時代、江戸時代の研究は多いが、平安時代から室町時代（中世）の研究は乏しい。更に、古今集を、万葉集から源氏物語に至る過渡的な文学として軽視している。

古今集は、紫式部、定家、世阿弥、利休等が、美の規範として重んじた文学であり、何よりも古今集の美意識の分析と、それが各時代にいかに変化、発展したかを解明する必要があると考えられるが、和辻は自己の興味を持つ現象だけを取り上げた偏狭な説を述べていると言われても致し方ないと指摘している。

③ 古今集の美意識について梅原の考え方：

正岡子規はもっぱら万葉集を褒め称え、古今集をくだらぬとけなしている。歌は感情を述べるものであって、理屈が多い古今集はくだらぬ歌と子規は断じている。

しかし、梅原は、心から自然を愛し、人間を愛した古今集こそ日本の美意識の根源をなすと反論している。古今の美意識は自然との親近感の上に立てられた芸術、感情移入型の芸術であり、悲哀の濃い日本的感情の原形が作られた。

古今集の歌人達は「時間志向的美意識」で自然をこよなく愛したが、とりわけ春の桜と秋の紅葉をめでた。例えば、

A：【春】久方の ひかりのどけき 春の日に しづ心なく 花のちるらむ（紀友則）

B:【秋】ちはやぶる 神代もきかず たつたがわ から紅に水くくるとは (在原業平)

C:ほのぼのと 明石の浦の 朝霧に 島がくれ行く 船をしぞ思う (柿本人麻呂)

この古今集の歌 C は、最も日本の美の理想、余情の美、幽玄の美を表現していると梅原は主張する。日本の美意識は、古今集でピークに達し、もう一つのピークは中世の新古今集に見る幽玄の美意識である。そしてこの美意識が禅と結びつき、能となり、茶になり、俳句になり、「わび」「さび」「いき」と変わってゆくと言うのである。

④世阿弥の三体理論と後鳥羽院の三体和歌論について：

能に於けるシテの舞の姿、即ち「老体」、「女体」、「軍体」（男体）から成る世阿弥の三体理論、能役者はこの三体に通じなくてはならないとされる。

世阿弥の三体理論は、歌論、とりわけ後鳥羽院の三対和歌の影響があったのではないかと考えられる。三対和歌とは、古今集以来の歌のテーマである「春夏」「秋冬」「恋旅」をそれぞれ「太く大きに」「細くからび」「艶に優しく」と言う美的感情によって分類したもので、世阿弥の「軍体」「老体」「女体」に対応する。

後鳥羽院の和歌三体は、美的理念の分類を主として季節の差異によって行ったが、世阿弥の三体は人間の生命の差異と言う客観的な差異の基準を見出したと言う点で世阿弥三体がより論理的であるとしている。

⑤足利義満の金閣寺の三層構造と世阿弥の三体論：

他の芸術ジャンルの具体例として、金閣寺に三体理論との類似性を指摘している。

第1層：王朝風の神殿造り（基本に王朝精神） → 世阿弥の幽玄の女体に相当

第2層：武士風の書院造り（その上に武士精神） → 世阿弥の軍体に相当

第3層：禅宗風の建物（更にその上に禅宗精神） → 世阿弥の老体に相当

この3種の精神構造は、義満の文化統合の原理ばかりか、政治統合の原理であったかもしれない。世阿弥の三体論も、その精神構造に於いて義満と同じである。

しかし、世阿弥には義満に無い独自の美の世界があった。それはおそらく、狂人と鬼と死霊を主人公とした闇の煩惱の荒れ狂う世界であったが、その様な衝動の激しさが、ここでは観照の精神と共存しているのであると述べている。

世阿弥の三体は日本の文化を流れる三つの美的理念を示しており、この様な美的理念の組合せによって、日本の色々な芸術の美意識が説明できると考えられる。

⑥徳川家康が建立した二条城・二の丸御殿の障壁画（襖絵）に於ける三つの美意識：

大広間：将軍と外様大名が対面する場所。武士道精神の象徴である盤石な老松、巨大な雌雄の松を中心に、孔雀、鋭い目の鷹などが描かれており、剛直、威厳、華麗な雰囲気醸し出している。即ち、剛健の美を表している。

黒書院：親藩、譜代大名が将軍に対面する場所。優美な松、竹、梅、牡丹、白鷺、菊、桜、雉子、紅葉などを描き、優雅の美を表している。

白書院：将軍の居間、将軍以外のいかなる男子も入る事を許されなかった部屋である。松

で象徴される剛毅な気分も、桜で象徴される優美の気分もなく、水墨画や雪で示される静寂で孤高、**幽玄の美**に包まれている。

この三つの美意識（剛健・優雅・幽玄）は、深く日本の精神史を貫く美の類型である。

襖絵を描いた**狩野派**の絵師達は、あたかも日本文化史に於ける武士精神の意味を先天的に理解していたかの様に、剛健の精神を中心とした三つの美学を統一して表現した。

§ 3. 各宗教の教えと、その功罪：

宗教は人々の不安や恐怖を緩和し、苦しみから救う働きを持っている。死について考える事は、生について考えることに直結している。そのことによって、今のこの生を有意義に生きられる。しかし、宗教に「危険な側面」があるのは事実である。今ある社会と価値観に飽き足らないからこそ宗教を起こすので、ある種の反社会性を帯びるのは当然の事である。この宗教の反社会性が悪しき方向に突出した時、オウム真理教事件のような事になる。死後の救済は、自殺の誘因になるし、原理主義者を自爆テロに走らせる根拠になる。

宗教対立が絡んだ戦争 or 紛争は、中東紛争、イラン・イラク戦争、印パ戦争、ボスニア紛争、北アイルランド戦争、ホローコスト等がある。

1998年インドネシアのボソで、イスラムに帰依したムスリムと、キリスト教信者の間で抗争が勃発し、数千人の死者が出たボソ宗教戦争があり、今でも緊張状態が続いている。

更に、16～17世紀、ヨーロッパに於けるカソリックとプロテスタントの対立から起こった下記の様に長期間にわたる一連の宗教戦争がある。

A. ユグノー戦争：1562～1598（フランス宗教戦争）

B. 80年戦争：1568～1648（スペイン、オランダが中心）

C. 30年戦争：1618～1648（デンマーク、スウェーデン、フランス、ボヘミア）

宗教は戦争を否定する教えを含んでいる筈であるが、政治や民族主義が複雑に絡んで戦争になっている。戦争の原因は、「宗教対立」と「富や資源の奪い合い」に大別できる。

§ 4. キリスト教の教え：

キリスト教にとって神とは、天地宇宙の創造者にして唯一絶対の支配者がキリスト教における神である。キリスト教の神は基本的にユダヤ教の神の理解を引き継ぐ。それは人間と契約を結び、救おうとするが、同時に神に背く者には厳しい裁きを下す神である。新約聖書では、神が罪に満ちた人間を救済する為に、神の子であるイエスを地上に遣わしたとされている。

キリスト教はユダヤ教の一派として始まり、当初異教徒が改宗するには、ユダヤ教の戒律を守る必要があった。そんな中、異教徒への積極的な宣教をパウロが積極的に進めた。ユダヤ教の律法、食物禁忌、割礼等の習慣を廃止。その結果、民族宗教から普遍宗教へと転換、ローマ人やギリシャ人にも受け入れられる様になった。迫害期を経て、当時の世界帝国だったローマ帝国の国教となり、世界に広がる条件を整えた。

キリスト教は1神教で、バチカン中心のカトリック、聖書主義のプロテスタント、ギリシャ正教・ロシア正教等の東方正教会、英国国教会、クエーカー、モルモン etc 多数の

宗派がある。旧約聖書と、キリストの弟子達の記した新約聖書の両方を信じた人々がキリスト教徒になった。信徒数は約 21 億 7 千万人で、世界人口の約 3 分の 1 に相当する。

ユダヤ教は旧約聖書のみ信じる人々である。

仏教は自力で修行によって仏になると言う考え方であるが、聖書は、「あなた方が救われるのは、決して行いによるのではない、主イエスキリストを信頼し、その教えに従って行く者は誰でも救われる」と約束している。

I. 創造説：世界は神様によって創造された。この世の神はたった一人の造物主のみであり、それに比べれば人間の賢さなど、高がしれている。

II. 隣人愛：キリスト教倫理の根本原理である。旧約聖書 19 章 18 節に「あなた自身の様に、あなたの隣人を愛さなければならない」とある。

イエスは神を愛すると共に、この隣人への愛こそ最も大切な戒めと教えた。

また、今助けを必要としている人の隣人になってあげる事に意味があるとして、善きサマリア人の例えを語ったと言われている（ルカによる福音書 10：25）。

神を信じて神を愛し、同時に、助けを必要としている全ての人を等しく愛する事によって初めて神に救われるというのである。

（イスラム教については、ご参考資料（その 2）「§ 6.イスラムの世界」をご参照下さい）

§ 5. 仏教の教え：

仏教は多神教で、最初はお釈迦様だけだったが、土着信仰を取り込み、釈迦・阿弥陀・薬師・大日等の「如来」、観音・普賢・文殊等の「菩薩」、不動・愛染・孔雀と言った「明王」、帝釈・毘沙門等の「天」など、沢山の仏が居る。また、宗派も多く、他の宗教に比べて遙かに多様性に富んでいる。その多くは、苦悩は執着によって起きると考え、修行によって四苦八苦（生老病死、愛別離苦 etc）の苦しみから解脱（悟りを開く）する事を目的としている。仏教は単なる信仰ではなく、生き方である。

仏教の世界観は輪廻と解脱：仏教の目的としての救済を意味する言葉は、「解脱」「涅槃」「菩提」がある。「解脱」は束縛から解放される事、「涅槃」は苦の炎が消えることである。苦の消滅は可能であり、苦の消滅に至る道（八正道）があり、四つの真理（四諦）への信念が原始仏教の中核をなす教義となっていた。

「解脱」+「涅槃」=「菩提」という等式が成り立つ。

「生老病死」の他に代表される苦と同時に輪廻の苦がある。聖者にとっては、生死流転という永遠に続くと思われた苦からの解放、輪廻の消滅という形で実感されていた。

この世に偶然によって起こる事は何もない、全てに原因があるとする（カルマの法則）。

【仏教に於ける五戒】：

- I. 不殺生戒：いかなる生き物も殺したり、傷つけたりしてはいけない。殺生を忌み嫌い、生きとし生けるものの繁栄と幸福のために行動する事。
- II. 不偷盗戒：盗んだり欺いたりしない。正直に寛容に分ち合う事に喜びを見出す。
- III. 不邪淫戒：正直に交際し、真実の愛と慈悲を育む。
- IV. 不妄語戒：偽りや、中傷、荒々しく、軽薄な言葉を使わない。

V. 不飲酒戒：心と身体に有害な酒や麻薬を採らない。謙遜・感謝・簡素を心掛ける。

§ 6. 「ブッダ 真理の言葉」佐々木閑著（花園大学教授）：

仏教は、キリスト教、イスラム教など、他の宗教に比べて遙かに多様性に富んでいる。日本の仏教だけでも禅宗、浄土宗、浄土真宗、天台宗、真言宗、日蓮宗など、数多くの宗派が活動している。しかし、その多種多様な仏教も、元をたどれば、たった一人の人が生み出した一つの教えであった。その教えが、五百年、千年と言う長い時間を経て様々に変化し、それが今の複雑な仏教世界を生み出した。

その最初の仏教創始者が**仏陀**（お釈迦様、ブッダ、釈迦牟尼とも呼ばれる）である。

そのブッダの教えは、4つの柱から成っている。「一切皆苦」「諸行無常」「諸法無我」の真理を理解すれば、悟りを得て「涅槃寂靜」に至ると言うものである。

【一切皆苦】全てのものは皆思い通りにならない。この世で生きることは本質的に苦だ。

【諸行無常】全ての物は常に変化してゆく。生じては滅びるのが物事の定めである。全ての物事に永遠の実体は無いと言う「色即是空」と似た概念である。

【諸法無我】全てのものにおいて、「私」とか「私の物」と言う実体は存在しない。執着とは、「自己中心」の世界観から発生する。自己中心の考え方に立つ限り、欲望は消えないし、きりが無い。中心人物たる自分を「実在しない仮想の存在」として、その絶対存在性を否定すると、当然、自己を取り巻く世界も仮想の世界となり、執着も自ずから消える。

【涅槃寂靜】悟りの境地に至った人には、生死はもはや関係なく、絶対平安の境地に至る。時間の流れを超えた真の安らぎを得る。

悟りの境地に至る為の修行生活の基本は、ひたすら「瞑想」による「精神の集中」である。「精神の集中」は、動物の中で人間にのみ与えられた能力であり、その雑念が取り払われた時の集中力が、人類の様々な文化を生み出してきた。数学も、美術も、音楽も、文芸も、科学も、スポーツも、人類の優れた成果は全て集中した精神の産物であると言っても過言ではない。「釈迦の仏教」は、個人を救済する道であるだけでなく、人類が叡智の眼を開き、素晴らしい文化を生み出す可能性を胚胎した母体でもある。

§ 7. 「いまこそ宗教の力が試される」森達也著（作家、映画監督）：

一方、現在はびこっている物質至上主義（物欲の世界）がいかに儂いものであるか、物質とは自然がちょっと身震いしただけで、一瞬で消え去ってしまう性質のものである。日本人は確固たる宗教観を持たない人が多いと言える。宗教心を含めてもう少し強固な精神性を多くの日本人が持っていたら、物質至上主義の社会にはならなかったかもしれない。

§ 8. 「歩行禅」松尾心空著（松尾寺住職）：

「**莊子**曰く、真人の息は是を息するに踵を以てし、衆人の息は是を息するに喉を以てす」**白隠**の内観とは、横隔膜を意識して空気を消化するという思いを込めて呼吸をしなさいと教えている。呼吸を意識しながら歩く（巡礼、登山、散歩 etc）事は、歩く瞑想につながる。

これを歩行禅という。ヒポクラテスは歩く事は良薬であると言っている。

座禅は瞑想の最たるものであるが、行住坐臥、即ち、立ったままの禅、座席での禅、寝ながらの禅など、四六時中、禅・瞑想のチャンスがある。祈りも一種の瞑想である。

長生きしている高僧の共通点とは：

- ① 姿勢がよい（立腰）。
- ② ゆっくり息を吐く（丹田呼吸）。
- ③ よく歩く。
- ④ 小食・粗食。
- ⑤ 1合以内の晩酌。
- ⑥ 若年時、病弱（健康を過信しない）。
- ⑦ 心優しい。

§ 9. 「美を求める心」 小林秀雄著

絵や音楽は解るとか解らないとかいうのが、そもそも間違っている。絵は眼で見て楽しむもの、音楽は耳で聴いて感動するものだ。頭で解るとか解らないという筋のものではない。頭を働かすより、眼や耳を働かす事が大事である。但し、見るとか聴くとか言う事を簡単に考えてはいけない。見る事も聴くことも難しい、努力を要する仕事である。

画家が花を見るのは好奇心からではなく、花への愛情である。美しい絵を眺めて感動したとき、その感動は言葉では言い表せないと思った経験は誰でもあると思う。絵や音楽が解ると言うのは、絵や音楽を感じることであり、愛する事である。

『田児の浦ゆ 打ち出でて見れば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける』（山部赤人）

この歌を読んで、美しい歌と思うのなら、美しいと思わせるものは、この歌の文字通りの意味ではなく、赤人の感動が我々の心を打つからだ。歌人は言い現し難い感動を、絵描きが色を、音楽家が音を使うのと同じ意味合いで、日常のことばを綿密に選択して言葉を使って現わそうと工夫する。赤人は、富士を見た時の感動を言葉にしたと言うよりも、そういう感動に、言葉によって「姿」を与えたと言った方がよいであろう。

美しいと思う事は、物の美しい「姿」を感じることである。普通に言う物の形とか恰好とかいう事ではない。

「姿」を感じる能力は誰にでも備わっているが、この能力は、養い育てようとしなければ、衰弱してしまう事を知っている人は少ない。

今日のように、知識や学問が普及し、尊重されるようになると、人々は物を感じる能力の方を知らずしらずのうちに疎かにするようになる。

知識がどんなにあっても、優しい感情を持ってない人は、立派な人間とは言えない。優しい感情を持つとは、物事をよく感ずる心を持っている人である。

立派な芸術や大自然は、豊かに感ずる事を、人々に何時も教えてくれている。

書家・江口大象は「書は視覚でなく、心眼で見よ！心で読め！気韻、雅致、情趣、格調、幽玄、それこそが東洋芸術の本質である。形や筆使いと言った表面を見るのではなく、「気持ちで見よ」と主張している。

§ 10. 比叡山、千日回峯行者 酒井雄哉大阿闍梨の詩：

「歩くことが 生きること 雨の日も風の日も
山を越え 谷を渡る 花を見て花を愛す
人に会って 人を愛す 道はるかなり
行に終わりなく 人生また同じ 風の如く流れ 雲の様に散る」

この酒井雄哉大阿闍梨の詩を「ゴルフ道」に置き換えてみると、

「ラウンドする事は 生きること 雨の日も風の日も
山を越え 谷を渡る 白球青天に飛び 新緑眼下に広がる
家に居ては生ゴミ ゴルフ道場に通って開眼未だし
ゴルフ道に終わりなく 人生また同じ 白球風に流れて 宙に舞う」

§ 11. あとがき：

先人達の語録にもある様に、「美」というものは、研ぎ澄まされた心、即ち、明鏡止水の心で感じよ！という事ではないだろうか。それは仏道に於ける「涅槃寂静」の心の状態に近いように思われる。仏道に於ける煩惱や執着に捉われた状態、即ち、頭での理解に自分自身が拘束されており、心が濁っている状態の元では、「見えざる、聴こえざる、感じざる」になってしまう。

自然や芸術に接して感動する事は、感動する事自体が涅槃の境地へ一步近づく事になるだろうし、感動する為の心の準備プロセス（研ぎ澄まされた心へ）も涅槃への道のりへ進む事となる様に思われる。

そういう意味では、自然や芸術に接した時の「美に対する強い感動」は（弟が音楽によって癒された様に）一時的とは言え、仏道に於ける「涅槃の境地」と深く関わっている様に思われる。

以上

【引用文献】

梅原 猛著『美と宗教の発見』（創造的日本文化論）講談社

佐々木閑著『ブッダ 真理の言葉』（仏教は心の病院である）NHK 出版

森 達也著『いまこそ宗教の力が試される』

松尾心空著『歩行禅』

生誕百年記念展・小林秀雄『美を求める心』（株）ジパング & （株）新潮社 編集

上田閑照他編『宗教学のすすめ』筑摩書房

巽 直道述『真実の般若心経』産能大学出版部

田里亦無著『道元禅入門』産能大学出版部

安藤貴之編集『キリスト教とは何か』pen別冊

（音楽の治療効果については下記の著書がある）

多田・フォン・トビツクル房代著「響きの器」人間と歴史社刊、

日野原重明著「音楽の癒しの力」春秋社、